

# The Gallery voice

NO-37

編集・発行／画廊沖縄〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2009.1.17  
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

## Sweet400 ～彷徨える砂糖たち～

金城 満

砂糖の原料のさとうきびは、インド、ベトナム、中国南部を経て沖縄に移入、1420年代後半には栽培が行われていた。製糖法は、1623年に儀間真常が中国へ使者を派遣しその技術を習得させたのがはじまり。圧搾機も時代とともに木製、石製、鉄製へと変わっていった。首里王府は、換金作物としてさとうきびを重視し、栽培の制限や専売制を実施。明治12年の廃藩置県まで統轄していた。

近世から現代まで沖縄の歴史をみる場合、砂糖無しでは考えられない。

砂糖の甘みは幸福感に満ちている。しかし砂糖は肥満や糖尿病等の原因になる食品として問題視されることもあるし、習慣性、依存性も指摘されている。

□この標示の中に入ってはけません。

甘い痒さ。心地よいのか不快なのか、どこか痒い。搔く事が習慣化し、原因を探さない。原因があるのかさえもわからない。

甘さの中を、彷徨っているのか漂っているのか、どこへ向かっているのか私自身、不明である。しかし確かに身体のどこかが痒い。搔こうとするとその場所が分からなくなる。静かに自覚しようとする、静かに移動しているのがある。自覚できないのに移動を感じる矛盾である。おそらく誰もが生まれながらに持っているものかもしれない。または、この島にある精神的風土病かもしれない。

□警音器を鳴らし続けなければいけない。

水平、垂直、斜め、一つおきに、二つおきにと視線は画面を彷徨う。そのうち画面上に痒い箇所がでてくる。そこを描く。その繰り返しである。

音の記号である楽譜は通常、左上から右上へ、水平に時間が流れていく。繰り返したり、速くなったり、強くなったり、休んだり、消えていったり、重なったり、複雑に響いていく。しかも、同じ音は無い。測定上、同じ音でも条件で違ってくる。

琉球音楽の楽譜である工工四は右上から左下、垂直に時間が流れていく。いずれも始点は、どちらも上である。これは、水平垂直、文章表記とも共通している。

□最大積載量とは重さそのものではありません。

原稿用紙の比率は美しい。升目も美しい。そう思うと、調和のとれた升目を壊さないかと心配で、作文できない。しかし升目が無いと不安で作文できない。二重の言い訳である。

Sweet400、画面上の刷り込まれた原稿用紙に、刷り込まれた文字は工工四。しかも「工四乙」三つの音のみで構成されている。音の順番は「工四乙四(ド・ファ・レ・ファ)」。

この繰り返しははじめから最後まで連続し重なっている。不協和音と二重性、過剰な依存性、升目に浮かぶ亡霊たち。時間の断片と、断片の時間。

絵画である視覚言語は、重層したもの、透過したもの、反射したもの等の組み合わせである。その組み合わせにゆっくり近づき、そっと捕まえる。捕まえた瞬間、砂になる。無意識が意識化され逃げた瞬間である。

□追越しは道路の右側部分にはみ出してください。



制作中の金城満

2009.1

言葉だけで考えようとする、私の場合、考える言葉を持ち合わせていない。言葉を的確、厳密に使おうとすると隙間がなくなり息苦しく、私の場合吃ってしまう。だから吃っている時程、言葉で考えている気がする。原稿用紙に書かれた音楽。画用紙(板)に書かれた作文。楽譜に描かれた絵。その隙間を黒く感光したフィルム。歴史に被爆した黒いフィルムが走る。

□安全地帯である事を示します。

日本へのカメラの伝来は、一説には1841年にオランダ船によって島津藩の商人が購入し、島津藩主の島津斉彬に献上し撮影されたという。また、日本最古の写真は1854年(嘉永7年)にペリー率いる黒船が浦賀沖に来航した折、黒船に同乗していた写真家が撮影したもので、南は琉球から下田・横浜・函館と北上しながら、日本の風景などを撮影していた。その中の浦賀奉行所の役人を撮影したものが最古の写真とのことである。

記憶の闇と、闇の記憶。原稿用紙の升目と、升目の原稿用紙。言葉の幽体離脱、音の幽体離脱、色の幽体離脱、かたちの幽体離脱。

□歩行者は通行できません。

Sweet400-double sugar-画面上に、三枚の写真が刷り込まれている。戦前沖縄から大阪に渡った祖父が撮った昭和初期の写真である。今は無い甲子園の浜で、同郷人とともに談笑している写真である。升目に浮かぶ写真。普通の庶民の家族写真である。

(美術家/きんじょうみつる)

## ～Sweet400シリーズによせて～ 400年の淘汰とミーム

杉尾 幸司

薩摩藩島津氏が琉球王国に侵攻した1609年の200年後、ある偉大な自然科学者がイギリスで誕生した。進化論で有名なチャールズ・ダーウィン Charles R. Darwin (1809-1882年)である。彼は、その50年後に自然選択による進化論を展開した『種の起源 The Origin of Species』(1859年)の初版を刊行する。そのため、今年(2009年)はダーウィン誕生200周年、『種の起源』出版150周年にもあたる。

ダーウィンと聞いて「弱肉強食」と答える人々がいるが、それはダーウィンが唱えたことではない。逆に、彼の唱えた説とは大きく異なる世界観である。「適者生存」とは強者が生き残ることを意味しないし、数の多い者が生き残ることをも意味しない。環境にもっとも適応した結果の適者なのであるから、環境そのものの変化によって適者は変遷することになる。

人々の価値観やものの考え方なども、歴史を通じてあたかも遺伝的進化のように伝わっていると感じる事がある。そのため、人々の間を連綿と伝わっていく価値観などを「伝統文化のDNA」などという表現をする場合がある。文化が継承・伝播されていく様子を生物進化の中の遺伝子になぞらえた比喩的表現だと思うが、比喩として適切な表現ではない。そもそも、遺伝子とDNAは同義ではない。DNAの塩基配列情報が遺伝子としての役割を担っているのであって、DNAそのものは糖とリン酸と塩基から構成されている単なる物質に過ぎないのであるから、この場合はせめて「伝統文化の文化的遺伝子(自己複製子)」という表現にしなければならない。実は、この文化的遺伝子に相当する概念として、リチャード・ドーキンス Richard Dawkins が著書『利己的な遺伝子 The Selfish Gene』のなかで、ミーム meme という用語を提唱している。ミームは、生物進化アルゴリズムの文化への適用という形で提案されたものである。したがって、「伝統文化のDNA」ではなく、「伝統文化のミーム」が正しい表現になる。

かなり長い前置きになってしまったが、今回の金城満展のテーマである「薩摩の琉球侵攻以降の歴史400年」のミームは、今の沖縄に生きる人々の間でどの様に形成されて、今後どの様に伝えられていくのであろうか。

薩摩の琉球侵攻の30年ほど前、日向国中南部を

支配していた戦国大名日向伊東氏は、島津氏の侵攻によって国を追われる。私事で恐縮だが、私の先祖は当時伊東氏の勢力下にあったため、伊東氏の敗北に伴って領地を追われることになった。しかし、系図を追っていくといつの間にかまた元の領地に戻ってきて現在に至っている。その土地に土着の勢力として生き続けてきた人々は、守護地頭として下向してきた戦国大名とは異なるネットワークを独自に持っていたのではないだろうか。



「Sweet400-blue sugar-」 顔料、膠、箔、油彩、板 116 × 180 cm

近世以前の歴史書は、主に支配者の視点からの記録であろう。薩摩の琉球侵攻について語られるとき、当時の琉球王朝の支配階層からの視点であることが多いのはなぜだろうか。自然界も人間の社会も人々が織りなす歴史の姿も、眺める角度によって多様な姿が写し出されるのではないだろうか。薩摩による琉球侵攻以前に、琉球王国によって侵攻され征服・従属させられた奄美諸島や先島諸島側からの視点は、400年の間に淘汰されてしまったのであろうか。王国の中で抑圧されてきた民衆の視点から眺めると、もっと違った風景が見える気がするのだが、このようなミームは琉球処分やアメリカの統治という淘汰圧の中では広がることが難しかったのかもしれない。

環境の変化によって適者は変遷する。そうだとすれば、これらの淘汰圧が弱まったとき、どのようなミームが適応し繁栄していくのであろうか。いずれにせよ、その時代にもっとも影響力を持つミームの姿が、未来の沖縄像を写す鏡になることは間違いないであろう。

「不協和音と二重性、過剰な依存性、升目に浮かぶ亡霊たち...」、金城満の作品に込められたミームが、これからの沖縄の中でどの様に伝わっていくのか楽しみにしている。

(琉球大学准教授/すぎお こうじ)

## 工工四に込められた、声なき声を聴く

三島わかな

あたかも、地層を連想させるような、顔料の重ね塗りから生みだされる質感は、四百年という歳月の積み重ねと、その重みを感じさせる。それはすなわち、作者である金城満氏の思考の過程であり、彼の思考の過程は同時に、沖縄の思考の過程として一体化している。沖縄の心の、より奥ふかい層にまで降りてゆくような感覚に捕われてしまう。その作品は、工工四をモチーフとしている。

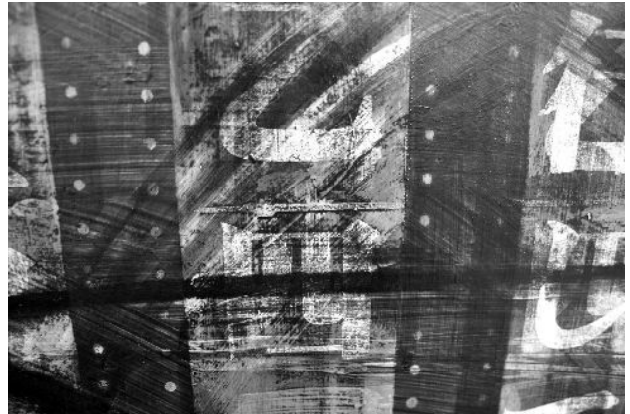
今日、現存する最古の工工四は、十八世紀末につくられた「屋嘉比工工四」である。それは、どのような楽譜かという、現在みるような工工四とは形態が少々異なっていて、升目のない、いわば「書き流し工工四」である。升目がないということは、三線音楽のリズムを、そこから読みとることができず、したがって、現存する最古の工工四は、三線演奏のためのプライベートな覚え書き程度の機能性しかなかったと思われる。そこには、他者の存在、すなわち三線音楽の奏法を、外部へと伝承しようという意識がまったく感じられない。ただ、三線奏者として屋嘉比が存在した重みを、ひしと感じるのみである。というのも当時は、口伝によるダイレクトな伝承法だったため、伝承に際して、いちいち楽譜を書き記すことなど不要だったのだろう。

その後、琉球国にも押し寄せることとなった近代化という大きな大きな波は、工工四の役割や機能性までもドラスティックに変化させた。すなわち近代以降の工工四は、これまでの「備忘録」の域から、あらたに「保存」という意識を身につけ、さらには「普及と伝承」という、近代ならではの機能性をかねそなえることとなった。プライベートな域から、大衆を意識した公的なものへと、楽譜としての工工四のスタンスが、この時、変化したのだ。

その際に、視覚面での大きな変化として、従来の、縦線も横線もない「書き流し」の形態から、「升目」へと変化した。琉球国の最後の国王となる尚泰から編纂の命をうけた野村安趙は、1869(明治2)年、升目を導入することによって、拍節を明確に伝える工工四を確立させた。それは現在、「野村工工四」もしくは「欽定工工四」と呼ばれ、以後、「升目」は工工四のシンボルとなった。

工工四に生じた次の大きな転機は、廃藩置県から約三十年後の明治末期のことだった。そこにみる変化は、工工四そのものの改良では

ないが、楽譜に対する考え方が変化した。すなわち、沖縄という垣根を越えて、いわばポードレスに三線音楽を普及し、伝承のあり方を普遍化する目的から、「工工四を五線譜に翻訳する必要性」が盛んに説かれた。現代におきかえて言うならば、国際語としての英語に翻訳するようなものである。それを牽引したのが山内盛彬や宮良長包であり、いずれも沖縄音楽の近代化を押し進めた教育人である。さらなる転機は、1935(昭和10)年に世禮國男が発案した「声楽譜付工工四」である。ここでは新たに、歌唱部をも含めて歌三線演奏の総体を固定化し、書きとどめることに尽力されている。



Sweet400-double sugar-(部分)

このように、工工四の歴史に想いをはせるとき、かつて、尚泰王の時代が「升目」に託した切なる思いは、まさに近代世界へと臨むべき決意のようにさえ感じられる。今回、金城氏は、この四百年の沖縄の歴史を工工四に重ねあわせることによって、ひとつひとつの「升目」に、いや、個々の「升目」の連なりを歌三線で演奏することによって、表現されては、すぐに立ち消えゆく響きに、どういった想いを託したのだろうか…。作者の想いはともかくとしても、彼の作品には、より多くの可能性がうごめき、ひしめきあい、潜在し、そして潜伏しているようにさえ感じる。観るもののイメージーションを、さまざまに掻きたてる。

歴史の叙述とは、そもそも人為的であり、個々の事象が書き記されてはじめて「歴史」と化す。そこには、書き記された事象よりも、はるかに多くの「闇」へと消え去った事象がある。金城氏の作品に、そっと耳をそばだててみると、四百年間にわたる声なき声も、聴こえてくるではないか！

(県立芸術大学講師／西洋音楽史、近代沖縄音

楽史／みしま わかな)



制作の合間にて

2008.11

## 金城満と Install-1609 企画展について

金城満氏に今回の特別企画展 = Install-1609 = の趣旨内容を話したのは、今年の正月を過ぎたころだった。企画書に目をやるなり「ほい来たか」という印象で受け止めてくれた。1609年の薩摩の琉球侵略支配から今年2009年は、ちょうど400年の節目の年にあたる。薩摩侵攻以降の江戸時代から琉球処分、皇民化教育、沖縄戦、米軍統治、日本復帰と歴史をなぞり、金城氏らしい自在な切り口で、話題が飛び交い会話が弾んだ。やがて現在の沖縄の状況論に話しがおよぶと、「アメとむち政策」、「巨大化する米軍基地」、「癒しの島」、「観光産業」、「不労所得」「全国一高い失業率」、課題山積の現実に表情が曇った。地元住人の我々が感じる「沖縄像」と観光客や外から眼差される「沖縄像」が乖離した現実があること。消費されるアイテムと虚像化し、「肥大する沖縄像」がまかり通る不思議な現実、など、。未来の沖縄像に「不安」が共振した瞬間だった。

制作の途中、私はたびたび金城の制作現場を訪ねた。昨年3月から制作を開始しているのだが、訪ねるたびに画面が変化していった。

私は正直驚いた。なかなか着地点が見いだせないのだろうか。側から見れば十分完成度の高い作品の出来映えである。画面の桐板に下地を塗り、箔を貼り、描き、削り落とす。また描き、箔を貼り削り落とす。浮上してきたイメージと作家自身の内部のイメージがかみ合わないのだろうか。400年の歴史が作家の身体に憑依したのか、何度も何度も描き、削る。去来するイメージと会話するかのようになんかイメージを金城は重ね続けた。

この多重層に集成したイメージにたどり着くまで金城はどのような思いを抱いたのだろうか。深い歴史の闇の中を、手探りで夢遊病者のように歩き回り、探索したに違いない。400年を振り返ると言うテーマが、あまりに重いのだ。歴史の経緯と様々な事象と向き合い、自問自答し制作している姿には頭が下がった。

ある時、金城は制作のテーマとなった「Sweet」について語ってくれた。「甘い、気持ちよい、人なつっこい、これはほとんど麻薬のようなものだ」と。さらに個々の作品名になった Sugar = 砂糖のことを話し始めた。「シルクロードは水平線の交流、シュガーロードは垂直線の交流でイメージできる。つまり、人々の長い歴史において、シルクロードは富める（強国）国同士の交流、シュガーロードは北の富める国と南の貧しい国の交流にほかならない。」と。乱暴な解釈かも知れないが、言い換えればシルクロードは対等の関係、シュガーロードは差別の関係に見える。

今回展示された金城氏の作品の前に立っていると、立ち眩みやめまいのような感覚に襲われる。二重三重に重層したイメージが見る側の身体を揺さぶり、「何か」を問いかけてくるのだ。つまり「誰か、何か」が正常な状態ではないのだ。

400年の歴史の中で刷り込まれ、染み込み潜伏する「何か」、明確に言葉に出すことは出来ないけれども、確かに何か「おかしい」、「変である」、自覚出来ない中毒に近い「何か」。金城氏の作品は、無自覚な神経を揺さぶり、沖縄の「自立」と沖縄人の「自律」と「自覚」、「主体性」を問いかけているようだ。

(画廊主／上原誠勇)